
秋時雨

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋時雨

【Nコード】

N2347B

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

家庭の事情で夜間高校に通う相楽未由。一年前の誕生日、彼氏の辰彦が目の前でひき逃げに遭ってから、未由の誕生日は彼の命日になった。事故から一年が過ぎたある日、一台の車が未由の目に留まった。それは、色こそ違っているが、辰彦を殺した車だと未由には判った。彼女は、バイト先の同僚長谷部の協力を得ながら、当時その車を運転していた人物の手掛りを探り始める。些細な超能力を持つ未由のPOPで物悲しい恋愛ストーリー！。

プロローグ（前書き）

このお話の主人公相楽未由は、超能力を持っています。しかし、それは非常に些細な能力で、日常に掻き消されるほどのものです。ラストまでは…

ブローグ

大通りの交差点で彼女は信号待ちをしていた。
大通りと言っても、都心から少し離れたこの道は、昼間は意外と空いている。

しかし、だからと言って、歩行者信号を無視して渡れるほどではない。

相楽未由は横断歩道の向こう側で信号待ちする少年が気になっていた。

ランドセルを背負っているが、身体が小さい為、まるで大荷物を背負っている行商のようだ。

彼は、ランドセルから取り出した、ゲームボーイで遊んでいる。
確かに歩道から出ている訳でもないし、近くに自動車の出入り口があるわけでもない完全な安全地帯だ。ただ、周囲の状況を一切遮断したような行動が、未由から見て不安だったのだ。

未由の横には髪の半分白いオジサンと、サラリーマンらしいスーツの男性が二人いた。通り向こうの少年の周りには、行き交う人が2〜3人。

その時、車が一台交差点に差し掛かった。

どう言うタイミングで行けると思ったのか、右折待ちをしていた車が動いた。

「ぶつかる！」

未由でなくても、明らかに判っただろう。

未由は、あの少年に視線を移した。

「やっぱり……」

目の前で車がぶつかる。その瞬間も、男の子はゲームに夢中だった。

未由は目を凝らして少年の手元を見つめた。

男の子の手からスルリとゲームボーイが抜け落ちて、歩道を転が

った。

男の子があわてて追いかける。

四角いゲームボーイがまるで野球のボールのように何処までも転がった。

その直後、凄まじい音が響き渡り、男の子が振り返ると、衝突で弾かれた乗用車が横断歩道のたもと、ちょうどさっきまで彼がいたその場所に突っ込んで来た。

男の子は、思わずゲームボーイを掴む前に、自分も転げてしまった。

「ふう。危ないよ……」

未由の額を汗が伝った。

事故車の周りには、瞬く間に人が集まって、直ぐに救急車を呼んでいるが、重傷者はいないようだったので、未由は青になった横断歩道をそのまま渡った。

男の子は通りかかったオバサンに起こされて、怪我は無いかわかっていたが、何でも無い様子だ。

未由はその横を通り抜けて、学校に向かう前に、CDショップへ向かった。

相楽未由18歳。彼女は定時制高校へ通う、ちょっぴり訳ありの普通の女の子だ。

「未由！」

同級生の豊崎麻須美が後から駆けて来て、未由の身体に絡みついた。

「麻須美、またクマでてるよ」

未由が麻須美の頬をつついて笑った。

「そうなのよ、寝不足でさあ」

麻須美は少しだけ悩ましげに言う。

彼女は寝不足が続くと直ぐに目の下にクマができるのだ。

「よう」

高瀬敦が声を掛けて来た。

「あれツトムくん、今日は早いね」

麻須美の言葉に彼は「ああ、今日はたまたま仕事が少なくてね」

高瀬敦は親の建設事務所を手伝いながら、夜間高校へ通っているのだ。

彼だけではなく、夜間高校へ通う連中はみな何らかの理由を抱えて、全日制へ通えない人たちだ。だから、生徒の年齢も様々で、鈴木麻須美は未由と同じ18歳だが、高瀬は今年21歳になる。しかも、未由たちより学年が一つ下なのだ。

定時制は、大抵の場合4年制である。未由と麻須美は4年生だが、高瀬はまだ3年生だ。

校舎はいたって普通。昼間は全日制の生徒が通う、ありふれた学校だ。

ただ、定時制の生徒が利用できる教室は決まっている。

「あああ。運動会の準備なんて、めんどくさいなあ」

麻須美が呟いた。

定時制も、全日制同様に学校行事があるのだ。年の離れた者同士が集まって行う行事は、サークル活動に似ている。

「しょうがないよ」

未由は笑って麻須美の肩を叩いて「でも、半分くらいしか出ないらしいよ」

「あたしも出たく無いけど、体育10単位は大きいよね」

運動会や遠足のような行事は、体育の単位に含まれているだ。

未由は、夕映えにぼっかりと浮かぶ雲を見上げて

「さ、今日もがんばろ」

【第1話】

「いらつしゃいませ」

未由は昼間、カジュアルショップでアルバイトをしている。

彼女の両親は3年前に離婚した。未由が中学3年生の時だった。

父親に女が出来て、家を出て行ったのだ。母親は何も言わずにそれを受け入れた。

財産なんて何も無かった。

活発で明るい未由は学校の成績はよく、友達も沢山いた。何よりも、小柄でよく笑う彼女は男子からも慕われていた。

しかし彼女は、母親を助ける為に全日制の高校を諦めて、定時制に通いながら働く事にしたのだ。

担任教師も何とかならんものかと最善を尽くしてくれたが、未由自身が面倒臭くなったのだ。

何も、無理をして全日制の高校へ行く事も無い。諦めてしまえば何の事は無かった。

ところが1年前に、母親に新しい男の人ができた事を知った。

未由はそれを喜んだ。

父親は酒に溺れるだらしない男で、母に苦勞が絶えなかった事を知っているからだ。

別に新しい父親が欲しいとは思わなかった。ただ、母がこれから幸せに生きてくれればいいと思ったのだ。

だから、未由は家を出た。

少しの貯金はあるし、3年目になる今の仕事も板について、発注作業も任されている。

引越し費用は中田が出してくれた。中田とは、母親の恋人だ。

清涼飲料水のメーカーで専務をしているらしい彼とは、再婚する気はないそうだが、未由にとってそれはどうでもいい事だった。

母がしたい様にすればいい。ただ、それだけだ。

「あたしの事は気にしないで。同じ都内なんだから、何時でも会えるし」

未由は何時も口癖のように母に言うのだった。

未由は桜台に小さなアパートを借りた。高校のある江古田にも近いし、働いているお店にも近かった。

彼女のアパートから自転車です分。富士街道を渡って路地を抜け、新目白通りに面した場所にその店は在る。

「すみません。ウエスト測ってもらえますか？」

若い主婦っぽい女性が声をかけて来た。

「はい。少々お待ちください」

未由はミシンの横にかけてある巻尺を手に、女性のウエストを測る。

「上かはら測って64センチくらいですので、60センチ、28インチで大丈夫だと思います」

彼女は笑顔のまま「こういったタイプをお探しですか？」

大きなショップの為、セルフが基本だが、声を掛けられればいくらかでも接客はする。

未由が、試着室に入ったお客を待つてフロアーに立っていた時、脚立に乗って子供服のディスプレイをしていた長谷部徹が声を出した「あつ」

未由が、その声に視線を移すと、長谷部が大きな脚立の一番上で、落としたディスプレイ用のポーチを再び掴もうと手を伸ばしてバランスを崩す姿が視界に入った。

未由は瞬間的に、落ちたポーチに視線を集中させた。

長谷部は無事ポーチを落とす事無く再び掴んだ。それは、まるでポーチの方から彼の手の中に飛び込んだようにも見えた。

長谷部はぐらついた身体で危うく転落しそうになり、空いたもう一方の手で小さな脚立の Teppan、丁度脚が乗っている小さな部分を掴んで

「やべー、危なかった……………」

それを見た末由は息をついて、呟いた。
「まったく、長谷部はそっかしいんだから」

相楽末由、もう直ぐ19歳の18歳。

彼女はちよつぴり訳ありの普通の女の子だが、少しだけ不思議な特殊能力がある。

手を使わずにモノを動かせる力があるのだ。

それに、気付いたのは小学3年生の時だった。クラスメイトが入院して、みんなで千羽鶴を作ろうと言う事になり、それぞれにノルマが課せられた。

家の茶の間で鶴を折っていたとき、少々飽きた末由は、これが飛んだらなあ。などと思いながら鶴を見つめていると、テーブルの上の折鶴数羽が、突然宙に浮いたのだ。

しかしそれは、超能力と呼ぶには恥ずかしいくらい小さなものだ。彼女が自分で実験した結果、大きさはともかく、最高3キログラムくらいのモノまでしか動かす事はできない。

しかも、調子が悪いと、3キログラムも動かない。補償範囲は1・5キログラムだ。

それが、いったい何の役に立つの……

妙に中途半端。

どうせなら自動車を吹き飛ばしたり、人間を宙に浮かせたりできればみんなに自慢もできるのに……

こんなの恥ずかしくて誰にも言えない。

まだ、スプーンでも曲げれる方が面白い。

末由は、自分で思う中途半端な能力を、誰かに言おうとは思わなかった。

【第2話】

未由は自宅の窓から外を眺めていた。たいした風景は見えないが、通りを挟んでマンションと一戸建ての家並みが見える。

彼女の部屋は4階なので、二階建ての民家は全て見下ろせるのだ。庭の塀に跳び上がる猫や、ほのぼのと眠る犬。そして、軒先に吊るされた籠のなかにいる、なんだか騒がしいオオム。

未由の部屋は、ベランダとそれに通じる大きな窓は南側にあるのだが、角部屋の為小さな出窓が東向きについているのだ。

未由はベッドに座って、その出窓からよく外を眺める。そう、あの時のように……

未由はあの日、彼氏が来るのを待っていた。

昼の1時には来れると言っていたが、もう1時30分。

その日は未由の18歳の誕生日だった。

彼は未由よりも2つ年上の、運送業者に勤める支倉辰彦。休みのはずだった彼は、急ぎの集荷があつて早朝にかり出された。

「川越までの配達だから、午前中には上げれる」

辰彦はそう言つて、電話口ですまなそうに笑つた。

仕事が大変なのは判る。母親も、自分を育てる為にパートへ出て忙しい日々を送っていた。授業参観など来てもらつたためしが無い。だから、そう言う面では束縛したくは無かつた。

自分も働いているので、何時臨時の出勤があるかもしれない。未由は仕事の大切さ、その責任の重さも知っているのだ。

「うん。大丈夫。待つてるよ。急がなくていいから気を付けてね」

未由はそう言つて電話を切つた。

1時50分を回つた頃、辰彦のバイクの音がした。

「来た」

未由の心は躍つた。

出窓から通りを眺めると、先の交差点を辰彦の青いバイクが曲がってくるのが見えた。

彼からは見えるはずもない距離で、未由は思わず手を振った。その直後、未由の目には信じられない光景が映し出された。

辰彦が曲がつてきた交差点から未由のアパートまでの道には、それと交差した路地が3つほど在る。

何れも、一方通行の細い路地だった。

2本目の路地と交差する場所。もちろん、辰彦の走っている道が優先で、細路地は一時停止がある。

しかし、一台の乗用車が細路地から交差点へ進入して来た。その車は一時停止どころか、減速すらしていなかった。

辰彦のバイクは、乗用車に大きく弾き飛ばされた。

バイクはおもちゃのように弾け飛び、辰彦の身体はマネキン人形のように転がった。

未由は夢か錯覚かと思った。

「辰彦！」

彼女は一瞬動けなかった。

まるでアクション映画のワンシーンのように、彼氏がバイクごと車に弾き飛ばされたのだ。

未由は目に映った事態の衝撃に、呼吸する事も忘れてしまうほどに、その路地を呆然と眺めていた。

手足がガクガクと小刻みに震えて動けなくなり、息が苦しくなっ
て慌てて呼吸をしたがそれもうまく出来ず、這いずるそうにして玄
関へ向かった。

早く辰彦を助けなければ。辰彦の所へ行かなければ。

彼女は必死に玄関で靴を履き、アパートを飛び出した。片足にス
ニーカーを履き、もう片方はサンダル履きだった。

すぐ近所の住人によって救急車が呼ばれ、辰彦は近くの救急病院
へ搬送されたが、間もなく息を引き取った。

ひき逃げ犯の車は見つからなかった。

あれだけの衝撃を受けて大きく破損していたはずなのに、都内、近県の修理工場にはそれらしい車が運び込まれていなかったのだ。未由も目撃者の一人ではあったが、距離があつたし、真つ白な特徴の無い乗用車。

あたしのアパートにさえ来なければ・・・

自分には特殊な能力がある。しかし、僅か3キログラムのモノしか動かせない自分に、何ができるだろう。

恋人の命を救う事さえ出来なかった。

こんな力、なんの役にも立たないのに…… 未由は自分を責めた。他にやり場が無かったのだ。

彼女には透き通る青空も、茜色に染まる夕日も、夜空に浮かぶ蒼い満月も、全てが灰色に見えて、それは永遠に続くのだと思った。

人間は生きるために忘れる事を知っている。未由の心の傷も次第に癒えて、やがて半月休んだ職場にも復帰し、学校へも通うようになった。

二週間ぶりに笑った時、彼女は思った。

辰彦を忘れるわけにはいかない。でも、笑顔を忘れてはダメだ。

これから先、あたしは辰彦の分も笑ってやるんだ。

それから、よく未由はこの窓から外を眺める。

もしかしたら、再びあの車があ路地を通るかも知れない。

そんな、些細な希望が頭を離れず、日中部屋にいる時、気がつく。とこの窓から路地を眺めているのだ。

警察の聞き込み調査で判ったひき逃げ犯の車の情報は、白いセダン・トヨタ車。それだけだった。

日中の目撃者は、主婦が数人だけで、間近で見たひと、車種を詳しく言える人もナンバープレートを見た人もいなかった。

ただ、未由は一つだけ手掛りになりそうな事を覚えていた。

【第3話】

空は晴れ渡り、月明かりに照らされた流れる雲がくつきりと見えていた。

「ねえ、未由。呑みにいかない?」

「麻須美は今日お店お休み?」

麻須美は、夜学が終わってから夜の仕事をしているのだ。そして、朝から、午後まで眠ると言う、全く夜行性の生活をしている。

麻須美の身長は165センチと、最近にしては普通だが、彼女と一緒に歩くと156センチの未由は、いつも妹のようだとからかわれる。

麻須美はスナックで働いている関係でいつもヒールを履くから、実際は170センチ近い高さがあるのだ。

「俺も行こうかな」

敦が後から二人に声を掛けて来た。

「行こう、行こう」

麻須美が明るく笑って未由にも「ね、行こうよ」

未由はなんとなく渋々と促されて江古田の居酒屋へ向かって歩いた。

「俺、そろそろ帰るよ。明日も朝から仕事だから」

敦がそう言って財布を取り出した。

「あたしも、そろそろ」

未由が言った。

「ええええつ、まだいいじゃん」

「ごねる麻須美に、未由は」

「普通の人は朝から働いてるんです」

と言って「さあ、あんたもたまには早く帰って寝な」

決して早いと言う時間ではなかったが……

3人が居酒屋を出て駅へ向かうと、上り口の階段で、4人の男が大声で口論しているのが見えた。

2対2の他人同士のようだ。4人とも酒が入っている事は誰の目にも明らかだった。

4人は口論に夢中で、駅の上り口を塞いでいた。

二人の女性が、駅へ入れず立ち往生している。

「なあんか、困った連中ね」

酔っ払いになれている麻須美がポツリと言った。

未由たち3人も一度は足を止めたが、このままでは、4人の口論に決着が着くまで、誰も駅へ入れない。ぐるりと周って、踏切を渡れば、向こう側の出入り口から入れない事も無いが、そんな事をする義理は無い。

「おい、みんなが迷惑してるだろ。喧嘩ならもつと端でやってくれ」

敦が4人に声を掛けた。

「なんだと！」

「てめえに言われる筋合いはねえ」

当然の展開だ。4人のうち、優勢に立っていた二人組みが凄んで声を出した。

「いや、みんな迷惑してるから。だからもつと端で……」

「てめえにはかんけえねえんだよ」

駅へ入りたい人たちには大いに関係あるのだが……

一人が敦の襟首を掴んだが、彼は動じなかった。

何か、何か飛ばせるものは？

未由は空き缶でも飛ばして、凄んでいる男にぶつけてやろうと思いい、辺りを見回した。

最近は何だかんだ言っても、ぱつと見て直ぐに空き缶が転がっている事は少ない。

未由は隅々まで暗闇に目を凝らして、やっと緑茶の空き缶が転がっているのを見つけた。

「おめえは引っ込んでろ」

男が敦に殴りかかろうとしたので、未由は急いで転がっていた空き缶に視線を集中させて飛ばした。が、彼女は酒が入っていた。それほど飲んではないが、彼女は酒にめっぽう弱いのだ。

思ったよりその影響があつたらしく、空き缶は浮き上がったものの、まったく見当外れの方へ飛んだ。

「あつ」

未由が声をあげた時、同じく麻須美も声をあげた。ガツンと敦が男に殴られたのだ。

彼は後ろへよろめいて、片手を地面に着いた。

「ちよつと、やめなさい！」

見かねた麻須美が小走りに割つて入る。

「あんたたち、関係ない人に手をだすんなら、警察呼ぶわよ」

麻須美が携帯電話を片手に通話ボタンを押しながら言った。

さすがに、彼女は酔っ払いの扱いにも慣れているのか、凄んでいた男二人はいそいそと階段から離れて去っていった。

残された男2人組みは少し呆然としている。

未由は敦に駆け寄つて

「大丈夫？」

「ああ、平気だよ。酔っ払いのパンチなんて」

「ごめんなさい」

「なんで、未由が謝るんだ？」

「あ、いえ……何となく」

未由は空き缶を素つとん狂な方角へ飛ばしたことを、つい謝ってしまったのだ。

「あんたも無茶ね」

麻須美が敦に向かって言った。

「大丈夫ですか？」

最初に立ち往生していた女子大生風の2人連れが敦に声を掛けた。
「ああ、平気、平気」

敦が笑って言うと

「助かりました」といつて、二人連れは階段を上がって行った。

「あら、惜しかったわね。もう少しでナイトになれたのに」

麻須美が敦に向かって悪戯っぽく笑って言った。

【第4話】

未由の日常はごく平凡に過ぎてゆく。それは周りに映るものがそうなのであって、彼女自身の生活は決して平凡とは言えないかも知れない。

ただ、自分の誕生日に、辰彦の墓参りをする未由も、他人の目にはごく平凡に映ることだろう。

未由がこの日、休憩室でお昼を食べていると、長谷部徹が入ってきた。

彼は未由と同じ年だが、全日の高校を出ているので、今はフリーターをしている。

夏までは、服飾の専門学校へ通っていたのだが、あまりの課題の多さに挫折してしまったのだ。デザイナーを目指していたらしい彼は「そのうちメーカーにでも就職するさ」とお気楽な感じた。

「長谷部もお昼？」

「ああ、今お客が引けたから」

長谷部はそう言いながら、近所で買って来た弁当を片手に、未由の向かい側に腰掛けた。

「未由は何時も自分で弁当を作るのかい？」

「ええ。慣れると何でもないわ」

「なんか、偉いな」

「ふふ、そうかな」

未由は少しだけテレ笑いを浮かべた。

長谷部は、お弁当をかき込むように食べ終わると、自分の鞆からゴソゴソと何かを取り出して、未由の前に置いた。

かわいらしい包装紙に包まれた箱をみて、まだ食べ終わっていない未由の箸が止まった。

「何？」

「今日、誕生日でしょ」

未由の驚いた顔は、直ぐに笑顔に変わって

「ありがとう。よく知ってたね」

「ほら、前に店長たちと喋ってたじゃん」

「そう言えば、そんな話したね」

未由は両手でプレゼントを持ち上げると

「なあんだ、じゃあ、覚えていてくれたのは長谷部だけか」

彼女は冗談交じりで呟いて笑った。

「まああね。俺、記憶力はいいいから」

長谷部が彼女の誕生日を覚えていたのは、記憶力とかの問題ではない。気になる女の子の誕生日なら、誰だって一度聞けば記憶するものだ。

「開けてもいい？」

「ああ、もちろん」

未由は嬉しそうに、プレゼントの包みを開けた。

長谷部はその様子を眺めながら、タバコに火をつけた。

「あつ、かわいい」

古木をくり貫いて、くり貫いた部分をそのまま引き出しにしてある小さなアクセサリー用の小箱だった。パツと見が、まるで森に落ちているただの木片に見える。

「ありがとう」

未由の素直に喜ぶ笑顔に、長谷部はつい紅潮して笑った。

彼は、彼女の複雑な家庭の事情を、少しだけ知っている。

自分は何不自由なく普通に高校を出て、専門学校も途中で辞めて両親と同居したまま、気ままなフリーターなどをしている。

だから、少しでも未由が嬉しい笑顔を見せると、長谷部徹もまた嬉しくなるのだ。

彼女が一人暮らしをしている事情は、たまたま雑談の中で聞いた話だが、長谷部は未由の何気に頑張り屋な所が好きだった。

そして、もっと早く彼女の事を聞いていたら、自分ももっと頑張って専門学校も辞めなかったのではないかと思った。

嬉しそうにプレゼントを箱に仕舞う未由の姿に、長谷部は何とも
いえない暖かい気持ちになるのだった。

「あ、あのさ……」

長谷部が、再びお弁当の残りをつつきだした未由に言った。

「なに？」

「今日、夜暇だったら、飯でも……… どうか」

未由はポカンとして長谷部を見つめた。

プレゼントはただの同僚の好だと思っっていたからだ。

それが、夕食の誘いと続けば、未由とてそんなに鈍い女ではない。
しかし、未由も長谷部の事は慕っている。なんと言っても、自分
が仕事を教える立場になって初めて入ったバイトの後輩が長谷部な
のだ。

ミシンがなかなか踏めるようにならずにイライラしたのも、今は
ウソのように軽やかに丈詰めなんかをする。

「いや、別にプレゼントの見返が欲しくて誘ってるんじゃないぜ。
他の友達と約束とかあるなら別に……」

少し慌てるように言う長谷部を見て、未由は思わず笑った。

「別にいいけど」

彼女は少し考えてから「でも、学校が何時も通りに終わるか判ら
ないから」

「じゃあ、9時過ぎに一度電話いれるよ」

「うん。じゃあ番号は……」

未由は自分の携帯番号を告げると

「やったじゃん。携帯番号ゲットしたね」

食べ終わった弁当箱を鞆に仕舞いながら、未由は他人事のように
笑って、長谷部をからかった。

【第5話】

「ねえ、これからご飯でも食べに行く？」

授業が終わって声を掛けて来たのは麻須美だった。

彼女もまた、未由の家庭事情は知っている。ただ、麻須美自身も、離婚した両親の元を離れて自活している身だ。

彼女の実家は千葉の松戸なのと言う。小さい頃から両親の仲は最悪で、弟と二人、何時もびくびく暮らしていたと言う。

夫婦喧嘩が始まると、父親は家のものを片っ端から壊し出すそう
だ。

それなりの企業勤めをしていた父は、また直ぐに壊した物を買
揃えるらしく、家の中は何時も新製品で溢れていた。

そんな中で暮らしていた麻須美は、お店で酔っ払いが多少暴れて
も動じないのだと言う。

暴れる父の行為がトラウマになったのではなく、それに比べれば
何でもなく感じるそうだ。

それだけ、父親の暴れ方は凄まじかったのだろう。

麻須美の両親も、未由と同じ頃離婚したらしい。

未由と麻須美が最初に弾んだ会話は、親の離婚話だったほどだ。

中学を卒業して直ぐに、麻須美は東京へ出てきた。地元で知り合
いだった人が、池袋に店を構えて、それを伝に仕事にありついたの
だと言う。

二つ歳の離れた弟も、今は家を出て高校の寮に入り、浦安で暮ら
しているそうだ。

女友達とは言え、そこが、長谷部とは違う所だった。

「ああ、ごめん、今日は約束があるんだ」

「えええ、未由。さては男できたな」

「そんなんじゃないけど」

「じゃあ何よ。誕生日に親友の誘いを断る用事って」

その時、未由の携帯が鳴った。

鞆から取り出した電話に出る彼女の横で麻須美が

「ほら来た。男からの誘いだ。いいなあ、いいなあ」

未由は笑いながら、麻須美が自分から離れるように手で押しやって

「もしもし」

「あ、俺」

長谷部だった。

「ああ、今ちようど授業が終わった所」

「どうする？」

「うん。大丈夫なんだけど……」

未由は少しためらいながら「友達も一緒じゃダメ？」

「友達？」

「うん。学校の友達なんだけど」

「別にいいよ。今日は未由の誕生日なんだから」

長谷部は何もためらわずに言った。

長谷部の電話の向こうで、「やったあ」と言う声が小さく聞こえた。

横で会話を聞いていた麻須美の声だ。

長谷部は思わず笑いながら、時間と待ち合わせ場所を決めて電話を切った。

「ほんとにあたしも行っているの？」

電話を切った未由に、麻須美が言った。

「もちろん。別に彼氏って訳じゃないから」

未由は電話を鞆に仕舞いながら

「それにあなた、今日わざわざ仕事休みにしてくれたんでしょ」
そう言ってから歩き出した。

未由は、麻須美がそういう娘だと言う事を知っている。だから親友でいられるのだ。

麻須美が食事に誘ってきた時点で、彼女が今日わざわざ仕事を休みにした事はおのずと予想がついた。

「へへえ、さすが未由、よく判ったね。超能力でもあるんじゃないの？」

「あんたの考えなんて簡単にわかるよ」

2人は江古田から電車に乗って、待ち合わせの練馬へと向かった。

【第6話】

翌日、学校へ行くと真つ先に敦が未由に声を掛けて来た。

「未由。昨日誕生日だったんだって？」

「えっ、ええ」

未由は大きな包みを渡されて、思わず戸惑いの表情を浮かべた。

「一日遅れたけど」

敦の差し出した包みは、思わず躊躇してしまう大きさがあつた。

「あ、ありがとう」

未由はとりあえず笑顔で「いいの？こんな大きい貰って」

「そんな、たいしたもんじゃないよ」

敦は笑いながら「昨日休むんじゃなかったなあ」

「あ、いいなあ。未由ばかりモテモテで」

後から教室に入ってきた麻須美が言った。

「麻須美の誕生日にもプレゼントあげたら」

敦が言った。

「なんか、大きさが全然ちがう」

麻須美が冗談混じりに口を尖らせて笑った。

闇に浮かびあがるビルのシャンデリア。連なる街路灯とそこを行き交う車の群れ。

高所から眺める東京の夜の街は、光のペイジェントに溢れている。その夜、学校が終わってから未由は、敦に誘われて池袋サンシャインビルの最上階にあるフランスレストランにいた。

「こんな所、初めて来たわ。高いんでしょ？」

未由は左右に並べられた複数のナイフとフォークを見て

「どれから使うのかさっぱりわからない」

「あはは、未由は一緒にいると和むよ」

敦はそう言って笑った後、ワインを注ぎに来たウェイターに「あ、車なんで」

そう言って、自分のグラスを手のひらで塞ぐジャスチャーをした。

「未由は少し飲めば」

未由は、敦に促されるまま、注がれたワインをそつと口にした。

窓の外を眺めると、浮び上る街の灯がいかにも非現実的で、未由は日常の悩み事などすっぽりと忘れてしまうようだった。

レストランを出ると、敦は未由を送って桜台へと車を走らせた。

「今日は有難う」

「いや、喜んでくれてうれしいよ」

敦の車は大通りから裏道を抜けるようにして、桜台まではあつという間だった。

本当はそれなりの時間が掛かっているのだが、未由にはそう感じたのだ。

未由はどうしてか、このまま一人になるのが寂しかった。

アルコールのせいなのだろうか。

いつも、一人の夜には慣れっこなのに……

何時もは何とも感じない、慣れたすぎた孤独感が、今日は何故か胸の奥に大きく押し掛かっていた。

「お茶でも、飲んでいく？」

アパートの前で車を止めた敦に、未由が言った。

「いいの？」

「えっ…… ええ。どうぞ」

未由は笑った。

「それじゃ」

と敦はさらりと車を降りて「ここ路駐へいき？」

「大丈夫よ」未由は笑って彼を自分の部屋へと促した。

「コーヒーがいい？それとも紅茶？」

未由が紅茶の葉とコーヒー豆を両の手に持って敦に訊いた。

「さつきコーヒーを飲んだから、紅茶を貰おうかな」

敦はそう言つて、ちいさなソファに腰をおろすと、部屋の中を何となく見渡した。

「何じろじろ見回してんの」

未由は入れてきた紅茶をテーブルに置いて「お砂糖は自分で入れてね」

敦は紅茶に砂糖を入れながら

「やっぱり女の部屋はきれいだな」

未由はプツと吹きだして「何言ってるの。女の人の部屋初めてじゃないでしょ」

「そうだけど、そんなに頻繁には入ったこと無いよ」

敦は、急に真剣な顔になって

「俺、なんだか未由を見てると、守つてやらなくちゃって思つちゃうんだ」

「あたし、そんなに頼りないかな」

未由は少しだけ切なく笑つて見せた。

「その逆さ」

敦は紅茶を一口飲んで、少し俯くと

「すっかりしなくちゃって頑張ってる気がして、支えてあげたくなくなるんだ」

未由はその言葉に、何故だか涙が込み上げて来た。

自分ではそんなに意思はしていないつもりだ。それでも、自分を育ててくれた母を少しでも助けようと定時制の高校を選び、働き、そしてつかの間の幸せだった辰彦を失った。

それでも未由は、立ち直つてこうして日々の生活を過ごしている。敦の言葉を引き金に、そんな自分に少しだけ、哀れさを感じてしまったのかもしれない。

「ごめん、俺、何か悪い事言つた？」

敦は、未由の頬を細く伝う涙に動揺した。

「うっん」

未由は大きく首を横に振って「ありがとう、敦」

敦はソファから降りて、未由と同じように直に床に座ると、彼女を抱きしめた。

久しぶりに抱きしめられる感触はとても暖かくて、未由に安堵を与えた。

未由はますます涙が止まらなくなって、敦の胸に顔を擦り着けた。

【第7話】

未由はいつもの時間に自然と目が覚めた。布団の中は裸だったの
で少し寒かったせいもある。

こんな姿で朝まで眠ったのは初めてだったから、自分の姿に思わ
ず顔が紅潮した。

シングルベッドの上には何時も通り自分しかいなかった。
確かに敦と……

未由は起き上がって下着を着けると、テーブルの上のメモを見つ
けた。

『おはよう！

俺は仕事だから、先に出かけるよ。

T U T O M U
』

やっぱり敦と寝たのは夢ではなかったのだ。

未由は自分が年上に弱い事を知っている。

ファザーコンプレックスだろうかと、自分でも疑ってしまうのだ。
父の愛情を受けずに育った彼女にとって、当たらずも遠からずだろ
う。

年上と言っても、敦にしても、辰彦にしても2歳しか変わらない。

しかし、彼女にとって、その僅かな年の差に引かれてしまうのも
事実なのだ。

未由は午後になって、店の外を掃除していた。歩道に投げ捨てら
れたゴミをちり取りで拾い集めていたのだ。

空は青々と晴れ渡り、ウロコ雲が薄く浮かんでいた。

未由は思わず立ち尽くして空を仰いだ。

どこか遠くへ遊びに行きたい。そんな気持ちにさせる青い空だった。

そのまま何気なく視線を降ろすと、ふと路上駐車の高い車に目が止まった。

この店のまん前に止めてあるのだから、おそらくはお客様の車だろう。

しかし、その高い車が、未由は何故か無性に気になったのだ。そろそろと近づいて見る。

あまり、見たことの無い深い黒色は太陽の光に赤っぽいラメがキラキラと反射していた。

こんな黒があるんだ。未由はその不思議な黒色に見入っていた。何となく見たリヤの黒いガラスには何かの跡が見える。

ステッカーを貼っていた跡だろうか、光の加減で僅かに何かが見えるのだ。

彼女はその跡がくつきり見える角度を探して自分の頭の位置を変えた。

未由はその跡の形を見て、記憶が蘇える。

あの、恐ろしくも憎らしいあの日の記憶。

辰彦が車に跳ね飛ばされた瞬間の記憶が。

そのステッカーの跡。それは、あの時の白い乗用車がリヤガラスに貼っていた形と同じだった。

未由の記憶の中で、パズルのピースをはめ込むようにピタリと一致した。

まさか…………… この車？

でも、これは黒いわ。どうして？

市販のものなら同じステッカーを貼っていたとしても不思議ではない。だがしかし、車のシルエットが同じなのだ。

そして、貼られていた位置。

全てが未由の記憶に当てはまった。まるで、間違い探しの二つの画像を照らし合わせるかのように。

ただ、色だけがまるつきり違うのだ。

未由は見えない何かでその場に括りつけられたかのように、動けなくなってしまった。

「相楽さん！」

店内から店長の呼ぶ声がして、彼女の責任感が、その硬直を解きほぐした。

「いま行きます」

彼女は何時も通りに、元気に返事を返して店内へ駆け込んでいった。

「ねえ、長谷部」

「なに？」

「あんた、車くわしい？」

「車？どうして？」

「うん、ちょっと」

「俺、バイクしか持って無いからなあ」

商品整理をしながら、未由は長谷部に話し掛けていた。

彼は、スウェットシャツをたたみながら「車がどうかしたの？」

「後から違う色に塗り替える事なんてできるのかしら」

「そりゃ、できるさ。好きな色に替える人もいるから」

未由は思いもかけない答えに少し驚いた。

「そんなに簡単にできるの？あんな大きなものを」

長谷部は少し笑って

「確かに大きいから大変だけど、シヨップは専門でやってるからどうってことないんじゃない」

「そうなんだ」

未由は長谷部の応えに、少しだけ感心した。

「車の色がどうかしたの？」

「うっん。別に。何でも……」

彼女は話を変えようと

「ねえ、今日入ってきたこのスカートかわいくない？」

未由はハンギングされた商品を手にとって、自分の身体に当てて見せた。

「えっ、あ、ああ」

長谷部は急に話を変えられて、戸惑いながら笑みを返した。

【第8話】

次の日、未由は何時もより早く店に入った。彼女は店のカギを預かる立場にある。

何時もは長谷部が必ず一番にくる。その後が未由だ。早く来たからどうだと言う事は無く、清掃の時間までバックルームでお茶を飲んでタバコを吸っているのだ。

勿論、特別な場合を除いて、規定の時間までタイムカードを切つてはいけない事になっているから、本人にとって何の徳もないのだが、早く来るのが好きな人がいる事は確かだ。

未由は、まだ誰も来ていない店のセキュリティを解除して、従業員通用口のドアのカギを開けた。長谷部が休みの日は、当然未由が一番に来る。

しかし、彼が休みの日まで待てなかった。

未由は昨日の黒い車のお客を突き止めた。店を出る姿を見たとき、車に乗り込むのが見えて、慌てて今精算したPOSレジの画面を確認した。

メンバーズカードの会員番号が表示されている。それを暗記したのだ。

POSの端末には会員の住所録が全て入っている。それを呼び出して調べれば、あの男が何処の誰かが判るはずなのだ。

未由は荷物を置くと直ぐにレジカウンターへ行つてPOSを立ち上げた。

コンピュータのPOSレジは、電源をONにただけで直ぐに使用できるわけではない。

立ち上がったPOSから、顧客リストを呼び出すと、画面いっぱいにポイント会員の住所録が出て来る。

会員番号を検索にかけて呼び出す。

「出た！」

『谷脇秀隆：住所 - 東京都練馬区中村橋・・・』

未由は住所と電話番号全てをメモして、POSを通常画面に戻した。

「どうしたの？」

長谷部がすぐ横に来ていた。

未由はメモした紙を慌ててポケットに仕舞い込んで

「えっ、うつん、別に。いまレジを立ち上げたところよ」

「そう」

「あ、コーヒー入れようか？今日は何だか、朝早く目が覚めちゃつてさ。それで、早く来ちゃった」

未由は矢継ぎ早にそう言いながら、バックルームへ戻って流し場でコーヒーを入れた。

長谷部は、少し怪訝そうな顔で彼女を眺めていた。

「ねえ、車の塗装って何処に頼むのかしら」

未由はベッドの中で敦に訊いた。

「車の塗装？」

「ええ、車の色を塗り替える時とか」

「どうしたの？車でも買うの？」

「まさか。ちよつと気になっただけ」

未由はそういつて、敦の胸に頭を寄せた。狭いシングルベッドの上では、もともと身体がくっ付き合ったままだが、彼女はさらに彼に寄り添った。

あの車の持ち主がわかった。住んでいる所も自転車で行ける距離だったので、未由は直に確認に行ったのだ。

アパートの駐車場には、確かにあの黒い車が停まっていた。

しかし、そこまでだった。

それ以上は調べようがない。

まさか、いきなりあの男を捕まえて、ひき逃げ犯だろうと迫る事も出来ない。

何時、何処で色を塗り替えたのか、修理の跡はあるのか、そう言っただ事は未由にはまるっきり調べようが無かったのだ。

【第9話】

今日は朝から冷たい雨が降っていた。一日中降り続いた雨は、夜になっても止む気配はなく雨足はだいぶ弱まったものの、まだ小雨がぱらついていた。

日曜日と土曜日は、未由も朝から閉店までバイトに入る事が多い。学校が休みの日は出来るだけ通しシフトで入るのだ。

夜の11時まで営業しているこの店は、高校生のバイトを夜9時で上がりにする。

閉店処理が終わって、正社員の柴田、未由、長谷部がラストのメニューだった。

店長は10時頃帰って行った。

それなりに商品整理も終わって、バックルームで一服と、柴田と長谷部は缶コーヒを片手にタバコに火をつけた。

二つの揺らいだ煙が、換気扇の方に向かって薄らいで消えていく。タバコを吸わない未由は、缶コーヒだけを手にしていた。

「今日は暇だったなあ」

柴田が言った。

「一日中雨でしたからね」

長谷部が笑って、応える。

「でも、何だか靴下がやたら売れてましたよ」

未由が笑って言う

「あれ、何だろうね」と、柴田。

夕方来たおじさんが、30足ほど靴下を買って行ったのだ。
「発注しておきましたから」

と未由が言った。

「さて、そろそろ帰るか」

柴田が、タバコを揉み消して「明日、二人共早番だよな」

「そうです」

未由と長谷部が同時に肯いた。

長谷部が吸殻を流し場の三角コーナーに捨てて、燃え残りによる出火事故を防ぐ為に、タバコの吸殻はゴミ箱には入れず、必ず湿気のある流しの三角コーナーへ捨ててののだ。

その時、突然従業員通用口の扉が開いて、中にいた3人は驚いてドアの方を振り返った。

通用口から2人の男が入って来た。

いや、顔には目出し帽を被っていたので、正確には男と判らないが、ガ体からして男に間違いなかった。

「なんだ、お前ら」

長谷部が言った。

一番出口に近いところにいた未由は一人にあっという間に抑えられて、ナイフを突きつけられた。

何が何だか判らないうちに捉まってしまった。突然の事で、未由は声も出なかった。

「静かにしろ！声を出すな」

もう一人が、大きくはないが良く通る声で言った。

「社員は誰だ？」

柴田は震えた。

「俺だ」

柴田は強張った口調で、それでもしつかりと言った。

「よし、俺たちは金が欲しいだけだ。言う事をきけば誰も怪我はしない」

手の空いている男はそう言うてから「お前もバイトか？」

流しの前に立つ長谷部に言った。

長谷部は小さく肯いて「僕と彼女を交換して下さい」

「なんだお前、この女に惚れてんのか？」

未由を捕まえている男が笑った。

「お前も来い」

もう一人の男が長谷部を呼び寄せて自分のナイフを突きつけた。

「いいか、言う事をきかないと、死人が2人は出るかもしれないぞ」
長谷部を捕まえた男は柴田に向かって言った。その落ち着いた声が、逆に不気味で危機感を煽った。

柴田はぎこちなく肯いて

「金はほとんど無いぞ。売上は夜間金庫にもう入れてきた」

「じゃあ、つり銭だけでいい。金庫を開ける」

柴田は仕方なく、バックルーム奥の金庫に向かった。

彼は何も考えないようにした。言われるままにする他はない。

下手に動いて、本当に誰かが怪我でもしたら……いや、怪我で済めばいいが、誰かの命を落とす事にでもなったら取り返しがつかない。

それは管理者として適切な判断だった。

しかし、その時、長谷部が自分を捕まえている男の腕を掴んで壁に突き飛ばした。

完全に油断していた男は、されるがままに大きな音を立てて全身を壁にぶつけた。

未由は驚いた。彼がそんな行動を取るとは思わなかったのだ。

「てめえ！」

突き飛ばされた男は壁にぶつかった拍子にナイフを落とした。

すかさず拾おうとして屈んだその時、ナイフがひとりでに、まるで坂を滑り落ちるかのように床を滑って柴田の足元まで移動した。

そのナイフには、未由の視線が注がれていたのだ。

手を伸ばした男は啞然とした。平らな床に落ちたナイフが、勝手に滑って行ったのだから……

それを見ていた、未由を掴んでいた男も呆然として腕の力が抜けた。

長谷部はとつさにパイプ椅子を掴んで、ナイフを拾おうとした男の頭を力いっぱい殴った。

男はそのまま、うつ伏せに倒れ込んで動かなくなった。

未由を抑えていた男は動揺していた。彼女を掴む手が小刻みに震

えているのが、未由の身体にも伝わってきた。

後に下がればすぐに外へ通じるドアが在って、簡単に逃げられた。しかしその男は、長谷部に向かってナイフを手に突進した。

「ダメ！やめて」

未由はとっさに床の隅に置いてあったバケツに視線を送った。ほんとに偶然、さっき視界に入っていたのだ。そうでなければ、きつと間に合わなかった。

そのバケツは物凄い速さで床を滑って移動した。

長谷部に向かって足を踏み出した男は、目の前に滑ってきたバケツに足をつっ込んでしまい、前のめりに転がった。

何が何だか判らない長谷部だったが、とりあえず、そいつの頭もパイプ椅子で殴りつけた。

金庫の前で一人呆然と立ち尽くす柴田は、突然我に帰って

「け、警察に電話だ！」

【第10話】

「いま、救急車が来るから」

急いで駆けつけた警官3人のうちの一人が言った。

強盗に押し入った2人の男はその場で直ぐに捕まった。

ドラマのような勢いはなく、「23時33分逮捕」と言う事務的な声で、手錠は思いの他静かに犯人の手に掛けられた。

未由はバックルームに在った救急箱から消毒液を取り出して、長谷部の足に吹きかけてガーゼを当てた。

「大丈夫だよ。大した事ない」

バケツに足をつ突っ込んで倒れた男の手から離れたナイフが、長谷部の足をかすったのだ。

「傷、けっこう深いよ」

未由の言葉に、少し怯えた顔を見せた長谷部は「マジで……」

未由は悪戯っぽい笑顔を返した。

バタバタと現場検証が行われて、簡単な事情聴取が終わったのは、夜中の12時半を過ぎていた。

店の外の通りには、駆けつけたパトカーにそそられた野次馬が、思いの他集まっついていて、こんな時間にこの人たちは何処から沸いて出たのだろうか、未由は不思議に思った。

連絡を受けた店長とマネージャーも来ていた。

「おまえなあ、レジ金の30万円くらい、命にくらべりゃ安いもんだぞ」

長谷部は無謀な行動を取った事を少しだけとがめられた。

勿論、従業員の命の危険を思つてのことだ。

彼は、到着した救急車には乗らず、簡単な傷の手当てだけを受けた。

「マネージャーの俺が言うのも変だけど、命架けてまでやる仕事じ

やないからな」

金が取られて、それで済めばどうと言う事は無いのだ。会社は盗難保険も入っている。

明日、必要な場合はもう一度話を聞くかもしれないと言って、警察は撤収していった。

帰り道、長谷部は少しだけ元気が無かった。

「よし、長谷部、今日は何処かで飲んで帰ろうか」

店をでて直ぐの通り道、未由は彼との分かれ道に着く前に言った。酒に弱い未由が自分から呑みに、なんて言うのはまずありえない事だった。

長谷部は少し驚いた表情をしたが

「俺のはやまった行動で、危なく未由を危険な目に合わせるところだった」

「そんなことないよ。あのままお金だけ取ってすんなり帰った保証はないんだよ」

未由は慰めの言葉を精一杯言った。

長谷部は一瞬黙ったかと思うと

「でも、あのバケツ……… どうしてあそこにあっただらう」
「えっ？」

「アイツが転んだ時、足を突っ込んだバケツさ。もつと奥に在ったはずなのに」

「あ… あたしが、帰り際に使って、あの辺に置いたかも……」

未由は適当に言いくるめようと、ぎこちなく笑顔を作った。

怪訝そうな顔をする長谷部に、彼女は「ほら、居酒屋行こう。何処にする？」

そう言って、彼の背中を勢いよく叩いた。

さっきまで降っていた雨はようやくあがって、夜空を埋め尽くす雲の合間からは、明るい月が覗いていた。

翌月曜日の朝は大変だった。

何が大変かと言うと、商品発注でも掃除でもない。他のアルバイトやパートさんに散々事件の事を聞かれて、何度も同じ事を話さなければならなかった。

「長谷部君にやられるなんて、マヌケな強盗ね」とか「未由ちゃん、無事でよかったわね」

終いには「柴田君もあてにならないのね」などと、もっぱらパートのオバサンは言いたい事を言っていた。

未由は適当に愛想笑いで通したが、あのリアルな恐怖は、その場にいたものでなければ判らないだろうと思った。

確かにテレビや映画のワンシーンに比べたら、迫力も緊迫感も掛けていた。しかし、現実には首に冷たいナイフを突きつけられると、全身がすくんで動かなくなるのだ。

その中で、行動を起こした長谷部は、ある意味相当に頑張ったに違いないと未由は思った。

「いや、僕は従業員の安全を第一に……」

柴田が自分の置かれていた状況を何度も話す姿も見えた。

よせばいいのに、いちいち説明するから言い訳がましく聞こえてしまう。

いつものペースで仕事ができるようになった頃には、未由の上がりの時間だった。

ああ、これで、もう昨日の説明も終わりだ。

未由はバックルームで一息つくと、学校へ向かった。

帰りがけに見た長谷部は、これからまた夕方から来るバイトに同じ事を話さなければいけないと、少々げんなりしていた。

【第11話】

「未由！」

学校へ行くと、麻須美が凄い勢いで駆けて来た。

「あんたのバイトしてる店、強盗が入ったんだって？」

息を弾ませながら彼女は言った。

「あれ？麻須美、よく知ってるね。新聞取ってないのに」

「祥子に聞いたのよ」

祥子とは、同じクラスの女子生徒で、やはり夜の仕事をしている。短時間でそれなりの金額を稼ぐには、夜の街が一番なのだ。そして、一度夜の仕事をしてしまうと、昼間の仕事はなかなか出来なくなる。

生活サイクルからくる不快感もあるが、やはり時間に対しての給金が全然違うのだ。

麻須美は、人事のように呑気に話す未由の腕を掴んで「あんた、どうもされなかった？」

「大丈夫よ。犯人もその場で捕まったし」

未由は簡単に事件の経緯を話して聞かせた。

「へえ、あいつけっこう勇敢なんだ」

もちろん、長谷部の事である。

麻須美は笑いながら「きつと、未由を守ろうとしたんだね」

「ただ無謀なだけだよ」

未由は冷静な顔付きでそう言ったが、麻須美が言った事は充分に承知していた。

それなりに親しい友人達は、未由を心配してか、ただの好奇心か、色々と訊いて来たが、退屈な休み時間の暇つぶしには充分な話題だった。

2限目が終わる頃、敦が現れた。

麻須美が未由のお店の事を彼に話したものだから、学校が終わっ

てから3人はファミレスで食事をし、彼女は再び武勇伝を話さなければならなかった。

もちろん、主役は長谷部だし、落ちたナイフが勝手に滑って行った事や、犯人が何故バケツに足をつっ込んだのかと言う事には触れなかった。

「その長谷部君っての、勇敢だね」

敦はコーヒーを飲みながら素直に感心していた。

「バカなだけよ」

未由がそう言うのと、麻須美は「敦くんならどうする？」

「そうだな、その場の空気次第だろうけど、俺、喧嘩弱いしな」

敦が目を細めて笑った。

「あら、長谷部君も喧嘩が強いようには見えないけど……」

「じゃあ、正義感が強いか…… よっぽど未由を助けたかったか」

敦の言葉に、未由はドキツとして、麻須美に目配せした。

「敦くんどうする？ ライバル出現だね」

未由の表情を見て、麻須美が楽しそうに言った。

「あんた、お店に行く時間はいいの？」

未由がそう言ってジロリと麻須美を睨むと

「遅れるって、電話したもん」

彼女はそう言って笑いながら、食後のケーキを口へ運んだ。

【第12話】

火曜日になると、日曜日の事件は既に遠い昔の事のように、店の中は平然と稼動していた。

「あの、試着いいですか？」

「どうぞ」と振り返って、未由は一瞬固まった。

ジーンズを片手に試着室へ入ろうとしているのは、あの黒い車の男性だったのだ。

谷脇秀隆…………… 未由は平静を保ちながら、彼の入った試着室の

カーテンを閉め、靴を揃えた。

彼がひき逃げ犯と決まったわけではない。しかし、未由の心臓は、異常なほど高鳴った。

何も考えないようにすればするほど、身体が勝手に震えた。

突然カーテンが開いて

「すいません、丈を見てもらえますか」

未由はいちいちドキツとしたが、それを悟られないように静かに息を整えながら、その谷脇の裾丈を調整した。

折り曲げてある部分を物差しで計ってあがり丈にチャコで印をつけると、そこから2・5センチを目測で測ってさらに印をつける。

そこが生地のカット位置だ。

なれない場合は物差しの幅を使って縫いしろを3センチにとるが、ジーンズの場合、きれいに仕上げる縫いしろは約2〜2・5センチ。3センチでは多すぎるのだ。

未由は裁ちばさみで勢いよく裾をカットすると、ミシンに腰掛け

た。
ずいぶん気持ちは落ち着いていたが、まだ少しドキドキしていた未由は、軽く息をついた。

上系と下系をチャコールに替えて、裾の内側にあたる山の部分の

縫いしろを三つ折りにし、ミシンの「押さえ」を下ろして、手動で針を落とす。

自分の手前側の生地を更に三つ折りにしながらミシンをスタートさせると、あつという間に半周して、外側の縫い合わせの山へ来る。ミシンを覚える際、この山がなかなかすんなり越えられず、みんな苦労するのだ。

もちろん彼女も例外ではなく、初心者頃はだいぶ泣かされた。未由は山の手前で生地 of 折込みをチェックしながら、ミシンを稼動させるペダルで、ミシンのトルクを微妙に調整してやる。すると、一気に山を越えて、残りの半周を縫い終える。

もう片方も同じように丈詰めして終了。ミシンを踏んでいる時間は三分もない。

マイクで事前に渡した番号札を呼ぶと、谷脇がレジへ来た。精算をする前に、彼は丈詰めした裾を何気にチェックしている。

「うん、キミは上手だね」

「ありがとうございます」

未由は値札をバーコードスキャンしながら言った。

「この前、縫い合わせがずれててね。少し気になったんだ」

谷脇は財布から札を出しながら言った。

「無料で縫い直し致しますので、何時でもお持ちください」

未由はおつりを渡しながら微笑んだ。

「ほんと？」

「はい。何時でも」

「じゃあ、その時はキミを指名してもいいかな」

未由は少し驚いた。丈詰め of 指名縫いなんて聞いたことがない。それでも未由は愛想よく

「ええ、あたしでよければ」

未由はそう言いながらメンバーズカードを返す。名前は確認した。やはり谷脇秀隆だった。

彼女は「ありがとうございました」

と、元気に谷脇を見送った。
彼は機嫌よく店を出て行くと、通りに止めていた例の黒い車に乗り込んだ。

未由は敦の腕の中でまどろみに耽っていた。それは、とても落ちて着く心地よいものだったが、時々、ふと長谷部の顔が過ぎる。

あの時の必死の形相だ。

彼はあたしを強盗の手から救おうと必死だった。

刺されていたかもしれない。自分がもし、あの時バケツなどを動かす力が無かったとしたら、きっと長谷部は刺されていた。

あの大きなサバイバルナイフで刺されたら、助かっただろうか。

長谷部はそんな事も考えないで行動したのか。

それほど自分の事を思っているのだろうか……

こうして他の男に抱かれているというのに。

未由は心苦しいほどに、胸の奥が押し潰されるように傷んだ。

それと同時に、長谷部の命を救った自分の些細な力が、少しだけ好きになっていた。

「未由。起きたのかい」

敦が言った。

「ええ、もう少しこうしていたい」

「明日は俺、休みだからいくらでも付き合っよ」

敦は優しく微笑んだ。

【第13話】

未由はバックルームの隣にある小さな倉庫内で昨年倉入れした冬物商品の在庫チェックをしていた。

「ラムのハイネックが、赤・L・1、黒1・1……………」

「未由、ご指名がかつてゐるんだけど」

そう言つて、長谷部が呼びに来た。

「えっ、なに？」

「丈詰めの指名だつて」

そう聞いて「ああ」

と、未由は思い出した。

「指名なんてあつたの？」

長谷部が小さな声で言つと、未由は笑つて「あんたも指名されるように頑張りなさい」

未由は小走りにレジまで行くと

「いらつしゃいませ」

「いやあ、なんか悪いね。忙しいなら別に今でなくても」

あの黒い車の男、谷脇秀隆が言った。

「いえ、大丈夫ですよ。すぐ済みますので、店内でお待ちください」

「あの……………もし出来たら、一折分くらい短くできる？ちよつと長くて、地面を擦っちゃうんだ」

「はい、大丈夫ですよ。縫い目一折分、短くですね」

未由は笑顔でそう言つと、ミシンに腰掛けて、裾の縫い糸を一端ほどき始めた。

あの彼がひき逃げなどするだろうか。

見るからに誠実そうで、今時の大学生にしては礼儀正しい。

未由は彼に対して、営業スマイルではなく、自然に笑みがこぼれる事でそう感じていたのだ。

丈の詰め直しも程無く終了して、谷脇を呼んだ。

谷脇はジーンズの裾をチェックすると

「いいねえ。マジきれいだよ」

「ありがとうございます」

「お礼に、今度お茶でもどう」

「は？」

未由は少しだけ驚いたが、お客に誘われたのは初めてでは無かった。もちろん今までに誘いに乗ったことは無い。

しかし彼女はとっさに考えた。少しで親しくなれば、車の事を聞けるかも知れない。

去年の「あの日」彼が何処で何をしていたか知ることができる。

「じゃあ、今度お店には内緒で誘ってください」

近くで接客をしていた長谷部は、その会話が耳に入って動揺した。

「ちよつと、店員さん。この下のサイズは何処？」

「あ、は、はい、こちらです」

長谷部は慌てて接客に専念した。

「未由はああいうのがタイプなの？」

夕方、商品整理をしながら長谷部が近づいて来て言った。

「えっ？」

「昼間きた、ほら背の高い」

「ああ、谷脇さん。別にそんな事ないけど」

未由は別に誤魔化すつもりはなかった

「でも、誘いを受けてたじゃん」

長谷部は何時に無く、不機嫌そうな顔で言った。

「バカね、社交辞令よ」

未由はそう言って笑った。

長谷部は時々未由が判らなくなる。

単純に可愛いと思う時があるかと思えば、やけにしっかりしてい

て率なく何でもこなしてしまう。かと思えば誰とでも仲良く話をしているようで、実は本心を見せない……

どちらにしても、自分の気持ちが半分も届いてい無い事を彼は知っていた。

だから余計に、焦りにも似た嫉妬が起こるのかもしれない。

【第14話】

秋もだいぶ深まると、夜の風は冷たくなって日中の気温との差は大きくなった。

未由は谷脇に誘われて目白通りにあるステーキレストランへ来ていた。

「いいんですか、こんな所に連れて来てもらって」

「いや、大丈夫さ。ここは、見かけほど高くはないから」

未由は谷脇の車に乗って来た。

あの辰彦を跳ね飛ばして殺したかも知れない車に乗ったのだ。

ドアを開けた時、胸が締め付けられて涙が出そうだった。

しかし、これも辰彦の為と思い、腹を括ってその助手席に乗り込んだ。

桜台の駅からこのレストランまでは10分もかからなかったが、その間彼女は息苦しさに絶えていた。

谷脇は、あの爽やかな笑顔で話していたが、彼女は何を話したか

全く覚えてはいなかった。

作り笑いで言葉を返すのがやっとだったのだ。

未由は最初に出された水を一気に飲み干してしまった。

谷脇は、チョットだけ啞然とその姿を見ていた。

「ごめんなさい、何だか喉が渴いて……………」

未由が谷脇の視線に気がついて慌てて言った。

「最近乾燥してきたからね」

それでも、谷脇は優しい笑みを浮かべていた。

ステーキはとても美味しかった。

運ばれてきた肉は、鉄板皿の上で、まだジュージューと音をたてていた。

デザートのアイスクリューも自家製らしく、まるやかで格別だった。

谷脇は色々と未由に聞いてきた。

いつからあそこの店で働いているとか、桜台のどの辺に住んでいるのか、など。

未由もそれなりに会話を楽しんだ。

自分が定時制高校に言っていると話した時、谷脇の口から思いもかけない事を聞く事ができたのだ。

「へえ、キミも定時制なんだ」

「キミも？」

「いや、俺は正真証明大学生だぜ」

谷脇は笑って言うと

「俺の友達が、江古田の夜間高校に行ってるんだ」

江古田にある定時制と言えば、未由が通っている高校以外には無い。

「昔は、俺と同じ高校に行ってたんだけど、事情があって退学してね。そのあと、その定時制に通い出したんだ。今乗っている車は、そいつに譲ってもらったんだよ」

「あの車、人に譲ってもらったんですか？」

「えっ、あ、ああ」

未由が急に車の話に喰い付いて来たので、谷脇は少し驚いた。

「あの車、最初は白くありませんでした？」

「あれ？そくだよ。どうしてそれを……」

未由の顔色が変わった。

「あの車の最初の持ち主を教えてください。定時制の何て人ですか？」

「どうしたんだい？急に……」

谷脇はビックリして、飲みかけたコーヒーのカップをテーブルに置いた。

「ごめんなさい、ちょっと理由があって……」

未由は落ち着きを取り戻そうと、自分のコーヒーを一口飲んだ。

「高瀬敦って言うんだ。キミもあそこの学校なのかい？」

未由は、その名前を聞いたとたんには愕然として、彼の言った後半の問いは聞いていなかった。

足が音を立てて震えた。押さえようと力を入れれば入れるほど震えは止まらなかった。

「どうした…… 大丈夫かい？」

「え、ええ。ごめんなさい。チョットお手洗いに……」

彼女は震える足を無理やりに動かしてなんとか立ち上がると、バツクからポーチを取り出して、できるだけ普通の速度で歩いてトイレに入った。

なんで…… どうして敦があの手を。

まさか…… そんな事があるはずがない。そうだ、何かの偶然だ。あの車が以前白かったのも、リヤガラスのステッカーの跡もみんな偶然に違いない。

彼女は洗面台の水で顔を洗いたい気分だった。

目の前の鏡に映る自分の顔さえも歪んで見えた。

ハンカチを濡らして頬にあてて、落ち着きを取り戻した。

静かに深呼吸をすると、次第に足の震えが止まった。

そうだ、あの車に事故の跡が無い限り、断定はできない。

未由は冷静に思考を巡らせながら、唇にグロスを塗りなおした。

「大丈夫かい？」

席へ戻ると、谷脇は少し心配そうに微笑んだ。

「ええ、大丈夫。あたし、三日目がひどくて」

未由の言葉に谷脇は頬を少し赤らめて「ひどかったら帰ろうか？」

「大丈夫、ひどいっていても大した事無い。毎月の事だもの」

未由は普通に笑って見せた。

「ねえ、あの車、どうして譲ってもらえたんですか？」

「えっ？ ああ、あれかい？」

谷脇はおかわりしたばかりの熱いコーヒーにミルクを注ぎながら「飽きたって言うてたかな、アイツ。まだ買って1年くらいしか乗ってなかったんだよ」

「谷脇さんが譲ってもらったのって何時？」

「ああ、ちょうど昨日で一年経つかな」

谷脇は相変わらず笑いを浮かべて「車がどうかしたの？」

「うん。ちょっとね」

未由はわざと悪戯っぽい笑顔を返した。

「あの車、事故とかに遭ってないですよね」

「さあ、フロントは当て逃げされて直したって聞いたけど」

「何処で色を塗り替えたんですか？……… あ、友達も車の色替えたがっついて」

「あれは、俺の知り合いの塗装工に頼んだんだ。安くしてくれるし。頼んでやろうか」

「あ、ありがとうございます。その時は是非」

未由は再びコーヒーを口にして「その塗装工って、何処に？」

【第15話】

食事の後、未由は桜台の駅まで谷脇に送ってもらった。

家まで送ると言われたが、駅に自転車を置いていって、降りてもらった。

その夜、彼女はまったく眠れなかった。

出窓のカーテンを開けて、ベッドの中から月明かりの夜空を眺めていた。

辰彦をはねた犯人が見つかるかも知れないと言う希望と、それが敦かも知れないという絶望に挟まれた未由の思考は、もはやパンク寸前だった。

翌日、彼女は長谷部に付き合ってもらい、谷脇に聞いた塗装工場へと出かけた。

「未由、学校はいいのか？」

「今日は風邪で休むって連絡したわ」

2人は長谷部のバイクで塗装工場に来ていた。

環七沿いを走って、十条の辺りで路地を入った所に、その工場はあった。

車両専用の塗装工場らしく、国産から外車まで色々な車が敷地に並んでいた。おそらくそれらは作業待ちの車両なのだろう。

「おおっ、フェラーリじゃん」

長谷部が敷地の片隅を見て言った。

その間にも、未由は事務所に向かってズンズン歩いて行った。

「すみません。ちょっとお伺いしたい事があって来たんですけど」
受付のカウンターには女性がいた。

「なんでしょうか？」

意外に愛想が良かったので、気負っていた未由は少しだけ拍子抜けした。

「あの、谷脇秀隆さんに聞いてきたんですけど、お知り合いの方っ

ています?」

受付の女性は少々怪訝な表情で、後ろのオフィスを見渡した。

「工場長じゃねえの」

奥にいた誰かが言った。

「少々お待ちください」

そう言つて、受付の女性が、事務所の裏を回つて工場に行つたのが見えた。

未由は後で突つ立っているだけの長谷部に視線を向けると、彼は無言で肩をすくめた。

「私に用事と言う方は……」

痩せつぼちでやたらと低姿勢の男が後から声を掛けて来た。彼は作業場から外を回つて来たのだ。

「あのう、谷脇さんの車の色を塗り替えたとか」

「ああ、そうですよ。ここでやりました」

その男は作業服の胸のポケットから名刺を取り出すと

「あなたも全塗装をご希望ですか?」

そう言つて、腰を低くしながら名刺を差し出すと「私、斉藤といいます」

渡された名刺には斉藤聡史と記されていた。

「あ、いえ、あの……」

未由がどう話を切り出すか戸惑っていると

「ええ、どんな感じで仕上げるのか気になつて見に来たんです」

長谷部が割り込んで言った。

未由は思わず、助かった。と言うように、ただ笑顔を作った。

斉藤は敷地に置いてある、塗装が仕上がったばかりの車を見せてくれた。

「あの…… 谷脇さんの車は最初白だったんですね」

「ああ、そうだよ。元がどんな色でも大丈夫ですよ」

斉藤は綺麗なパールの入った白い車を指差して

「あれは、黒いのを白く塗り替えたんです」

「あのう、修理とかもするんですか？」

未由は様子を伺いながら訊いた。

「修理は板金でいどならウチでやりますけど、本格的な修理は系列の修理工場へ回します。と言っても、通りを一本越えた直ぐそこなんですけどね」

斉藤はそう言って笑った。

「谷脇さんの車も修理しました？」

「えっ？ 谷脇の車は塗装だけでしたね」

斉藤はそう言った後

「ただ、フロントの部品が一部新しかったから、アレは前向きに何処かへ刺さったのかも知れませんか……あ、これ谷脇には内緒だよ」

「谷脇さんは知らないんですか？」

「バンパーを擦られて修理したって言われたらしいけど、そんなレベルじゃないね。ラジエーターとかも真新しかったし」

「ラジエーター……ですか？」

「車のフロント部分に入っている、エンジンの冷却装置だよ」

長谷部が言った。

「あの車自体古くはなかったから、パツと見は目立たないけどね。僕らには目につくよ。ああ、これフロントやつちやってるって」

斉藤はひと通り敷地をあるいて自然に事務所へ足を向けていた。

未由と長谷部もついて歩きながら話をしていたので、気が付くと事務所の前まで来ていた。

「ずいぶん、谷脇の車を気にするんだね」

「あ、俺の車が谷脇さんのと同じで……」

横長谷部が言った。

「谷脇さんの車の修理って、何処でやったか判ります？」

長谷部が続けて「俺のもあちこち直したくて」

「アイツのは、前のオーナーが修理したんだろうからね。キミのはウチの工場で見えてあげるよ」

「あ、じゃあ今度おじやまします。今日はバイクなので」
長谷部がそいいながら頭をかいた。

夕日は完全に落ちて、明るい夜空に環七の街路灯が浮び上っていた。

連なる赤いテールランプに溶け込むように、長谷部の大型スクーターは二人を乗せて走っていた。

決定的な情報は得られなかった。

ただ、谷脇に車を譲った敦が、車を大きく破損させる何かをしたことは確かだ。

ただの自存事故かもしれないし、普通の衝突事故かもしれない。それが辰彦をひき逃げしたと言う証しにはならないのだ。

「ねえ、何処かで夕飯食べていかない？」

信号待ちで停車した時、未由は長谷部にヘルメットをくっ付けて言った。

【第16話】

新目白通りから哲学堂に向かう途中の通りに、敦の家は在った。

土曜日、未由は敦に誘われ哲学堂のグラウンドへ行った。彼の家
の会社で作った野球チームが、何処かのチームと試合をするらしく、
敦も出るからと観戦を誘われたのだ。

青い空が高く広がって、身体を抜けていく乾いた風が心地よかつ
た。

午前中に試合は終わり、未由と敦は哲学堂の公園を散歩してから、
彼の家で昼食をご馳走になった。

敦の家は敷地が広く、自宅の隣に会社の事務所が在った。それだ
けでもけっこうな大きさだ。事務所の裏には倉庫が二つあって、そ
の横には建設廃材のような細々としたものが小さな山を作っている。
「ねえ、これってゴミなの？」

「ゴミっていやぁゴミだけど、時々使えるのがあるのさ」

廃材といっても何かの部品がほとんどで、欠品しているものが見
つかる事があるそうだ。

隣にある倉庫はがらんどうで、二十坪ほどある室内の壁伝いに、
なにやら大きな壁のパネルなどが少しだけ立てかけてある。

ここも、建設物件がたて混むと材料でいっぱいになるそうだ。

未由は奥の隅に、車のバンパーのようなモノを見て、倉庫の奥に
足を踏み入れた。

「どうしたんだい？」

敦が不思議そうに、彼女を目で追った。

「ねえ、あれって何？」

倉庫の隅に立てかけてあったモノは、まさしく車のバンパーだっ
た。

部分的に大きく割れて、歪んでいる。

その隣にはなにやら金属の四角くて薄い何かのコアのようなもの。

しかし、それも大きく歪んで破損しているようだった。

「それは、車のラジエーターさ」

まじまじと眺める未由に、敦が言った。

「昔自分で交換してね。捨てず終いなんだ」

「これ…… どうして壊れたの？」

未由の足元には割れたヘッドライトが転がっていた。

「いやあ、居眠り運転で自分でぶつかってさ。そんなに金もないし、車いじるのは好きだから自分でほとんど交換したんだ」

「そう……」

未由が移動させた視線の先には、歪んだ白い鉄板が立てかけてあるのが目に入った。それが車のボンネットだと気付くのに少しの間がかかった。

「こついうの、自分でも直せるんだ」

「ああ、アッセンブリ - 交換って言って、パーツごと交換するだけだからね」

未由は歪んだボンネットに視線を止めていた。

その潰れてゆがんだ傷跡には青い塗料がべったりと付着していたのだ。

彼女は身震いしそうになるのを必死で押さえた。あの時の光景が目に浮かんで、膝が震え出すのを必死で堪えた。

紛れも無く、この塗料の色は辰彦のバイクのモノに違いない。そう確信できたからだ。

跳ね飛ばされたバイクの燃料タンクには白い塗料が付着し、タンクの塗料が傷になって剥ぎ取られていた。警察は事故当時、加害車両には、間違いなくバイクの青い塗料が付着しているはずだと言っていた。

「どうしたの？こんな所、別に楽しくないだろ」

敦は笑って、未由を外へと促した。

「修理した車はどうしたの？今の車は銀色よね」

「ああ、友達に安く譲ったんだ」

未由の中に、燃え上がる憎悪が急速に膨れ上がり溢れそうになった。それと同時に敦には関係無い事であって欲しい言う、悲願の思いが断ち切られた悲しみに打ちひしがれた。

それなのに、表面的には自分でも驚くほど、彼女は冷静だった。

「そう……」

未由はそれだけ言うと、無表情に笑って見せて、倉庫を後にした。

【第17話】最終話

日中に降りそそいでいた太陽は、暗雲に包まれ姿を消していた。沈みゆく太陽が今何処にあるかも判らない。ただ、辺りの景色はアツと言う間に影を無くしていった。

未由は新目白通りの歩道橋に立ち、大通りを見下ろしていた。

彼女の中に迷いはなかった。いや、迷いは昨夜の涙と一緒に全て吐き出した。

彼の優しさ、彼の想い出は、辰彦のそれとは比べられない。比べてはいけないのだ。

だって、彼は辰彦を殺したのだから。

あたしの誕生日と一緒に辰彦を永遠に奪ったのだから。

あの日から、あたしの誕生日は辰彦の命日に変って、それは何年経とうとも変わらない。消えることはないのだ。

どうして…… 未由は敦に問いたかった。しかし、そう問いたところで、彼が辰彦を殺した事実は変わらない。しかし、今から未由がしようとしていることが、どんなに愚かで、それを成し遂げたかと言って辰彦が戻ってはこない事も充分に彼女は判っていた。

これはしるしなのだ。あたしは辰彦を心から愛していた。

敦の優しさに、一時的には心を動かされたのは事実だが、彼は辰彦の命を奪った犯人だった。その犯人に抱かれ、それによって温もりを感じてしまった。

一番愛しているのは辰彦なのだと、心にしるしをつけなければならぬ。

長谷部は未由の様子がおかしい事に気が付いていた。朝からぼんやりして、仕事の上の空だった。そんな彼女はほとんど見たことがない。

「今日、生理痛でしんどいんだ」

そんな時でさえ、彼女は苦痛の中で笑顔を作る娘だった。

そして、何時もより1時間早く帰りたいと言う希望。彼女がそんな事を言ったのを見たのも、長谷部がここで働き出してから、おそらく初めての事だ。

長谷部は無断で店を出ていた。彼は本来そんな事をする男ではない。少なくとも、ここで働き出して、時には未由に叱られながら、仕事への責任感を培った彼は、無断で店を抜け出すはずなどなかった。

しかし、それほどまでに、未由の様子が気になったのだ。自分でも驚くほどすんなりと、まるで自宅を出てコンビニにでも買い物へ出かけるように外へ出てきた。

店長には後で謝ればいい。このぐらいでクビにはならないだろう。無断で職場を抜ける事に対してそんな軽率な思考が巡るのも、それだけ未由の行動に不安を抱き、何か危機感みたいなものを感じていたからに違いない。

長谷部が未由を追いかけると、自転車で新目白通りを走り、ある歩道橋の前で止まった。階段の下に自転車を止めると、ゆっくりとそこを上り、歩道橋の中腹で立ち尽くしたまま20分。彼女は動かない。

彼はその様子を少しだけ離れた細い路地の影から見ていた。

長谷部には、未由が何をしよとしているのか全く判らなかった。

未由はバックから、通常の半分の大きさのレンガを二つ取り出して歩道橋の真ん中に置くと、階段を下りた。階段の下影に入り、その場に立ち尽くして大通りを静かに見つめた。

その時、薄暗い空から落ちる雨音が、瞬く間に地面を黒く濡らしていた。

夕方の帰宅ラッシュで、道路は引つ切り無しに車が行き交ってい

た。

空を覆い尽くした雲によって、濡れ滴る景色は既に夜のように暗くなっていった。何処までも連なる車のランプが、雨に滲んで次々に通り過ぎて行った。

一台の銀色のスポーツカーが交差点から出てきて、大通りを走って来た。

数十台の連なる車両の群れの中でも、未由はそれをしっかりと確認していた。

この時間だと思った。月曜日は必ず彼は車で来る。仕事の関係なのかは判らない。今更それはどうでもいい事で、何時も通り彼が車で来た事実だけがあればいいのだ。

未由は瞳に力を込めて、近づいてくる銀色の車に視線を送り位置関係を確認すると、歩道橋の真ん中に視線を移した。

深い悲しみに包まれた、燃え滾る憎悪を、その１点に集中させたのだ。

長谷部には、未由が何をしようとしているのか、何を見据えているのか皆目見当が付かなかった。

未由が歩道橋を見上げた時、そこから何かが勢い良く飛び出した。長谷部は、誰もいない歩道橋の上から、確かにそれが投げ出されるように飛び出したのを見た。

その飛び出した物体は銀色のスポーツカーのフロントガラスをズシリと突き破って、車内に飛び込んだ。

長谷部は驚愕した。何が起こったのか判らなかった。

立て続けにもう一つ、歩道橋から飛び出した小さな塊は、同じ車にズドンツと命中した。

銀色のスポーツカーは横に振られて他の車と接触し、弾かれ、今度は反対側に振られて左の車線に飛び出した。都市バスが走って来て銀色のスポーツカーは勢い良く弾かれた。

右に弾かれた銀色の車は、元の車線に戻ったが、今度は後ろからダンプカーが急ブレーキを踏んでいた。路面は雨で濡れていて、そう簡単には止まらない。

ちょうど、未由の目の前で、銀色の車はダンプカーにぶつかってオモチャのように押し潰されながら、何メートルも進んだ。

走って来たダンプカーはほとんど車速を殺せていなかったのだ。

タイヤのホイールは剥き出しになって、潰れたアルミの車体と一緒にアスファルトを引きずられる音が激しく響き渡った。

それは、同時に未由本人の、心の叫びでもあった。

銀色のスポーツカーは、数十メートル引きずられて、他の車を2台巻き込みながらやっと停止した。その時それは、自動車としての見る影もなかった。

ねじれたボンネット、潰れたリヤゲートから剥き出しになったエンジンが、雨に打たれて真つ白な水蒸気を発していた。いくらエアバックがあっても、シートベルトをしていたとしても、運転者は生きてはいないだろう。潰れた運転席の奥には、高瀬敦の一部が、微かに覗いていた。

「未由！」

長谷部は思わず震える声で彼女の名前を叫んだ。

目の前の出来事が信じられず、現実味が無かった。現実味は無かったが、目の前にいる未由に対して、長谷部は恐怖を抱いて、クギで打たれたかのようにその場から動けなかった。

未由は静かに振り返ったが、そこには何かをやり遂げた達成感すら覗える、あやふやな笑みが零れていた。ただ、その笑みに、何時もの暖かさは微塵も無かった。

「未由……」

長谷部は、初めて見る彼女のドライアイスのように乾いて冷え切った笑みに、背筋が凍りつくような気がした。それは、彼の身体が冷たい雨に打たれていたせいではないだろう。

厚い雲の隙間から、西に落ちかけた太陽が覗くと、辺りは少しだ

け明るくなった。

まだ、日は完全に落ちていなかったのだ。それでも、降り出した雨は止みそうできて、まだ降り続いていた。

長谷部は彼女を呼び止める事が出来なかった。

全身が震えて、下顎がガチガチと音を鳴らした。

最後の西日は未由の頬を一瞬白く照らして、再び雲の波間に呑み込まれた。

彼女は自転車を押しながら、ゆっくり長谷部の前を通り過ぎると、濡れそぼる身体のまま、冷たい秋時雨に煙る夕間暮れの中へと静かに消えていった。

秋時雨　　了

【第17話】最終話（後書き）

最後まで読んで頂いた方々に、大変感謝いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2347b/>

秋時雨

2010年10月8日15時28分発行